画像
十二指

奇譚笑門紙

四

特
へ 13
968
4

遠門 3
諸 968
巻 4

本清

繪本黄草紙巻之四

玉泉堂膳丸戯編

昭和十八年七月購求

携手私奔走遊里
害人蜜逐電浪花

去程ゝ春城友之助ハ不意ゝ百金の恵ゝに逢當的難ゝ防ゝとゝ
金の主乃知ざれバ再び是ゝ労ゝして如何ゝして其人ゝ知んゝゝて只管
心ゝ委孫りる然るに此夜ゝ早亥の刻過る頃背戸の方ゝ女ゝ声ゝして
友之助主の物思ハゝ紅さゝ見ゝさゝ玉ふハ何ゝ寺の夏乃倩ゝりや
若金の主ゝ事ゝに侍ゝバそハ心ゝゝ玉ひて願くハ其主ゝ告やさんと
それゝ恭ゝゝ支ゝ免ゝ玉ゝるゝ中ゝ言ゝそハ望び支ゝふゝて疾

此方へ入らせられけると四谷て法と立て扉を開くふ豈計らんや其
ハ之迚曾仮初に相見し妓婦礒辺ゆゑて其節の傳ハ忘れて身躰
漸痩疲し面色頗る憂苦と帯髪鬢貞すかりいと中しし紅さ
ふく柔舩路を杖とし友之助の傍と居ようつ頭とうなずく言へ
るハいとさげ紅者と思食まんも怕羞ハ侍れど今斯病苦す
せるりゆくハ思ひし事も化野の露と消るん玉の緒も更く情つち
思ひくらべゆくるせあて未来の引導に君乃面答の聞まわし
くて耻を忍びて是迚参りて侍るなき妾ハ前の爰乃主礒辺と中
妓遊ていそやかる病の其元ハくいつもんとそれど隠り口の初瀬
く祈と岩本に誓し友の面答ざに聞入る紅ハ妾ゞ身ハ賤しと
又拙らふいと断くハ思ひ侍まど迷ひ初める恋の道暗にまぶれ

脊戸口まで忍び来りて窺ひ侍るに僅の事にいとさぶかく詈れ
玉ひめる紅聞くりくる有合せし少し黄金御用と立て嬉し紅
中にりゆ又是と便りに言よると思し召と夫ゞ又心すかるれ
るれさるし左程の浅き紅さひし紅心ハ侍ゞ天より良人と
玉りし思し召を御用ふ立くし玉ハれきしと左をおりひ右を
思ひ泪と共ふかるめるく友之助心中にるくく此女斯ゆで解
説ていくと無情く固辞もさぞ強顔とくみやをくん去るゞ
今かる色情く心と寄る所ゆ行ゞと言を正して言りけるく
分解聞ゆる言某身ふ置くく悦ばくハゆくひつまど爰く一齒の
大望有て此事果しに迚ハ紅るれる卒止ハ年がくし是のくく
免し玉りれくし言語同断此黄金又大姐の恵く玉りくハ過刻

よりの光景仔細に知らせ上ハ匿れよしなく此金今半借受ゆくひれ
爰一旬を過さば返納いたしゆくゆく好意の程ハ謝をるに詞なくはいと
残らず金を差出そふ礒辺ハ呀と一声叫ぶこゝハ情ある言と兼り
けりのうゑ前ふも聞へ侍らぐ〳〵所全生べくと身うつ〳〵わすれハ
うるゝの黄金何ふらせん君の御用に立ゐらばそもそも此世乃思ひ
出とかゝご極めて侍らるれ迚ふ契りの叶ふべきを逆縁ゐがらなれ
跡に思ひ出しるバ一遍の御回向願ひ侍らるれ催馬とぞうり立善る
かゝる足を踏出ゐ舩路の肩をかゝゆゐ畳の目に泪零
舟路もとゝゆくに友之助をうち見て気強きをうゝ武士乃習ひ
なるも情なしと嘆けど悔とて回答ざに
さらうゆゝ友之助を背看つ恨めしけに漸脊戸へ立出

しゞ南無阿弥陀佛と古井戸へ飛込裾り取付禿我身をちづこ井
戸側の内と外とに両人ゞ名ふ似ね礒辺ハ水の上舟路ハ立り力艸
放さじりのと身をいけるる友之助ハ斯と見る忙ハ〳〵走り寄り
難るゝ礒辺を助けいけげ我誤きり〳〵斯まで思ひ余りわゝと今
ハ何とて固辞べき大姐の言に任せ侍らん先に那方へ入せられ
ゆくゝて泣入二人乃手を取るゝ内ふ入ていたりるハ前る聞へ
つるゞ〳〵我大望のうら身るれぞはきゆゝも管待ゆるるり
斯まで命ふかゝれ思ひ何条見捨殺ちぐとう某いかゞ定す
妻もうゝざれバ事なり〳〵上ゐゝ兎も角をぜんりのとそ成
神に誓ひ〳〵嘘ハ〳〵〳〳養生を加へ〳〳其病を急りゆく
我も神に祈りて其許の全快祇持べくといたく舟路是を聞つ

友之助

舟路

君の左宣ふハ耆婆扁鵲の藥より百倍まさりて侍りぬとつゝ
磯辺ハ漸頭をもたゝげ賤しき身のいとゝかゝる見ゆゝしき
神ふ誓ての御言りをうけ妾が良人なる思ひ侍ることゝ今
死るとも心ゆかゝる雲ハ侍べり賤しきと遊びうかれくゞ妾が父も
本ハ某の士ふてゆゝしめれど浪ゝの身となりて今ハ城刄山崎
ゝ農業と支とゝ名を高濱松太夫と名乗る者の娘にて姉
多ゝ人ハ故有て播刄乃家士井関十内殿と中方へ不通ゝ遣ハし
其後追ゝ困窮ゝ逼りて未進と申ゝんふさゝ法より父ハ入牢
と聞めると幼心ふ悲みて望ゝて妾ゝ身を賣侍らぬ武士気質の
家尊るれバ志めて此事と許諾ぎりとさるべに言ふ侍
て斯ゝ申ゝ身ゝ成めるぞ其後絶ゝ音信ゝえより人

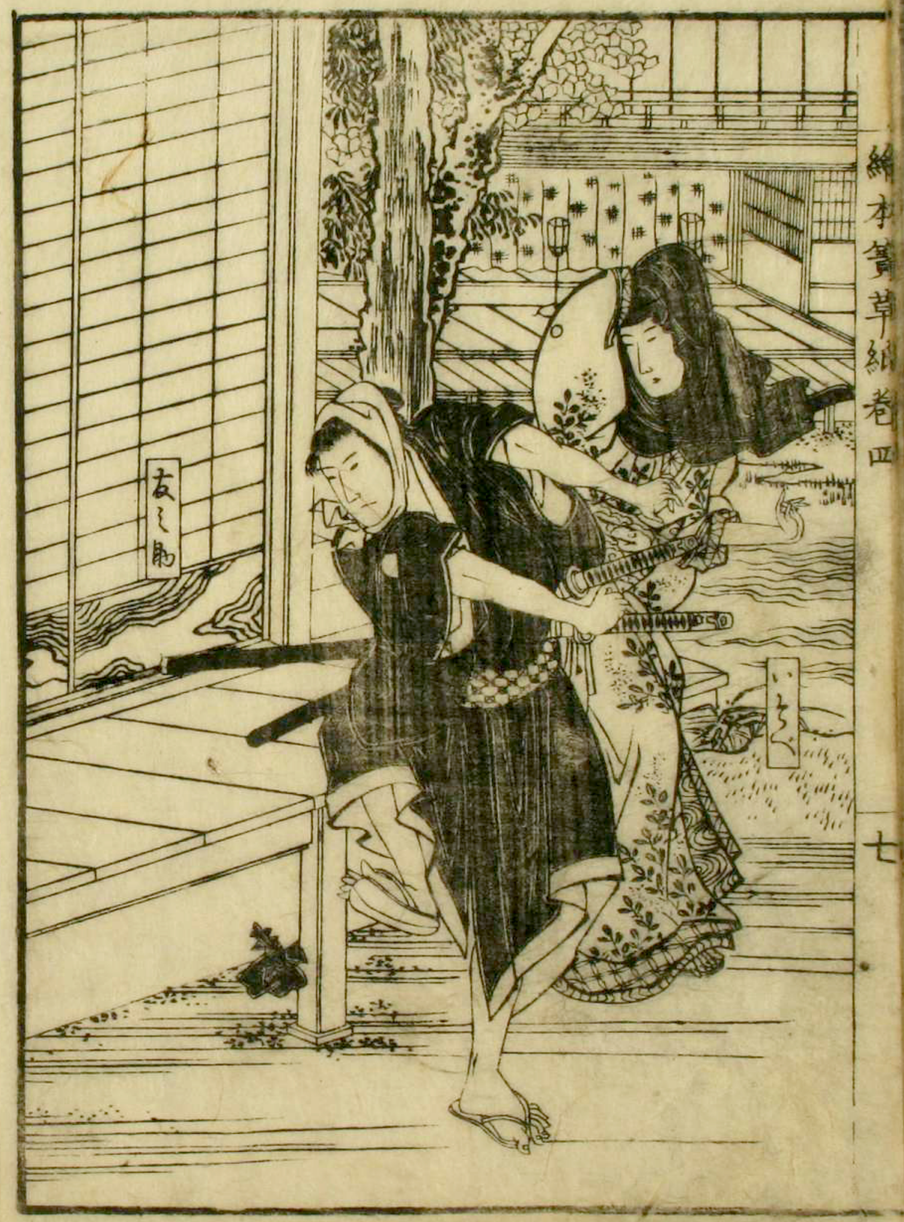
ゝ志ゝせずとゝるゝも尋ねをせで年月を送るゝ今年
初めて歯を染け傾城の列ゝ入侍をどゝゝる訣の侍りて中
其日より一個の客人色情ぶふなゝもせぐ此日中までの扱勤ゝ
今に此身ハ汚ゝ侍べり最前乃黄金まで皆此主の恵ゝてゆゝひ
ぬ今物語ゝ枝ゝハ人ゝ知ぬ夏ふ侍まで良人ゝ頼ゝうへ
るれバ匿おゝ明ゝひめゝ語を聞て友之助大ゝ驚
扱ハ甚許ハ沖津殿の妹ゝて有ゝゝと言に磯辺も驚ていゝ
ゝて沖津と知せ玉ふぞも君ハゝる御方子細と聞せ玉れゝと
ゝぞゝて止ざりゝ友之助つと立て手負ゝ守袋と取出ゝ
是と知ゝやゝ言ゝ磯辺もゝ懐ゝせゝ守袋と出ゝ引合ゝに
ぎゝべきゝ同物るれバゝゝゝに中ゝて呆ゝぐゝ成ゝて

友之助はいよいよ是に付猶物語りて有るれそは一大事の事なりとも斯るに上は包むべきを申されば尤外に人もなれば身のうへ明しは べしと聞くに舟路はつと立を友之助是を押止るは心利たる童なれ其許り置て何ぞ心を置べきにて即説其身播磨赤松家の臣にして同家中井関十内の正室梶子丹に左門の奸計によつて十内と我父出羽之助を殺害せし夏沖津は一子浦太良を懐ふして三國峠にて盗賊の為に擒るる其身猶り山賊の宅に至りて奇難より竟に鬼が峠ふく賊の火炮に命を落し其身行逢て遺言状聞置葬りて牌の石を建置しに夏まで一つにして落もるく語り扱ふて其敵を討んにて今爰に零落もるよし泪と共に物語るに始終を聞めて礒辺が心中裂がごとく病に

労きに上るれば うんと計ふ悶絶をを両人はうそ抱かく気付とりく水をそそぐるに漸正気出来てはいけるを去るそは妾なぐ幸るに者は はいざるぞうし幼さより北地に来しう両親在しは知るべし音信さもなしに身の一人の姉は播磨ふ在と聞ども是とそを賤しく妾が身を恥て逢夏さもるく子るに事ぞに問ふに山中に黄泉の客と成玉ひしとやそれしは まこべ姉上は一ときなるに武士に御給事仕玉へば今の今すぐに御出世をとうにやもしつ悦びつ妾にそるに迫も断に果べき身あしう彼は夏の年は明るを待姉妹よりて爺嬢に孝行せんと楽みにそるなぐ夏にて有つるよに返らぬ夏をおぐるやみの摺のうぐるに口説を哀傷やる方をりう友之助も尤と

舟路諸共脊らいるぞう其嘆らハさる事ぞ〳〵そハ言て返らべ今ハ其身を健ふし孝道を全へせれよ夜もいと〳〵更て有に今夜そと〳〵部家へ帰りゆく〳〵て歎きて沈むとなりて其夜ハ宿こゝ〳〵是よりして妹背の契り浅き〳〵ざる〳〵斯て礒辺も病へ疾く愈れバ日友之助礒辺へ向つくいくらく斯此地へ年ふるとゝくども未歇の手がゝりもなく〳〵ざるに今ハ余國へ拐索と思へるれバ大姐ハ兎角身とゝ〳〵ひ〳〵時成待ゆ〳〵事成るべ疾告ぎ〳〵せんと必ど悪らる諾〳〵玉ひを〳〵言て礒辺ハならぬ胸ぶをそハ断ふも侍そどゝるゆゝと限りるを旅て独り残て侍べきらハ妾が為ふる姉の歇るりのと伴ひ行て一太刀るりとも恨と報ゆせ玉ひ〳〵言にるハ思ひもうけぬ言支うか

歇と尋る長の旅へ女況其をるゆゝハ有況く大姐ハ数の黄金ふ代〳〵身を伴ひ出るハ某が罪歇と尋わる妨るべ〳〵妾へ勧めて其青信と待まゝ〳〵と言にされバ其支へて侍るるり近曽噂やつる一個の客人今日ハ此身と贖ひてんと家の長へ約〳〵身の代と渡〳〵わるるにゆ〳〵ハ翌日ハ其方へいざるあいと侍〳〵ん良人の仰と侍ど〳〵も妾ハ今宵忍び出ん准備へ侍るるれ良人へ頼りゝひわる君へ別を奉り何樂ふ存命侍〳〵ん迚も此支諾玉ひれバ君の手にうけ玉わる〳〵〳〵て思ひ昔べさ物りゝるれバ今ハ止るゝ方便るくてさ〳〵ぞ今宵忍出ん准備せめとて互ふ時刻を約〳〵つ別まて部屋へ入るる千金に替〳〵と情む春の日も思ひ有身に急れ〳〵更ると指りてかへつ待ふ程ゐ〳〵三更のかひての合図へ支之助へ得へ武さ士へ切へ


友ゝ助

客人

らるまぬ愛着の恋慕の闇のくらきに扉乃影ゆ身と忍ぶこゝろ
ゝと起立く帯引ゆる傍ゝ睡る舟路の顔ゝを日比妾と家業
も姉ゝをもりひ何一ツ妾が心ゆ〻〻〻ノ〻で口舌〻〻紀鴨毋のてゆ人
影ゆるゆ日南ゝなゆ病ハ其身に引くく神や佛ゆ願ゆゝで年
端もゆゆぬ北子ぞ〻〻姉とゆゆ〻〻義理も立恩を情も知るゆの成
多くの黄金と黄〻て贖ひ玉〻ゆ客人〻恩と仇ゆる大罪人ゆゝゝ
ゝゆの亡命ゆ〻〻〻ゆ言ゝゆれぬ備由も侍るにゝハ言ゆゝゝ妾が
料ゆ〻て玉ゆを客人ゆ簡〻てそれ尭舟路夫の恵ゝにゆれざるハ
又逢〻ゆ有〻ゆゝゝ北上ゆゝゝ身の養生ゆ大支ゝゝ
ゆゝと泣出を口ゝ袖ゆ〻〻〻〻尭舟路事のゝゝハ知て侍ゆ
ゆ何支ゝゆ中〻〻兎角ゆ御毎支と影ゆゝゝ是のゝ祈りい

ゆれ跡ハたゆを踏まてゆ何支ゆ考ゆぬふ〻て事と済〻いんゝ
人の見ぬ間ゆ早ゝゆ〻〻出さゝせ玉〻ゝゝてハ傍ゝ居〻紀ハ山
山ゆゝを急ゲせゆ心のゝゆ推〻て玉ハをゝゝゆゆ一所ゝ行
ゝゆ〻〻と声戦立じゝと喰ゆゆる恩愛せつゆる嘆きゆり斯くハ
果〻〻と立上りゆゝゆる裾と手ゝゝふ舟路見上見ゆゝと顔と顔
ゆゝ〻無てゆゝゆ〻〻と落る泪の雨やゝゆ気と取直〻立出て歩ゝ
ゆれゝゆる庭りせをゝどゆりの足どりに菊の若苗ふゝゝふぶ紀
漸扉ゝ立よれハ待りゆけゝゆる友之助物とゆる言ひ手と取く急ぐ
ゆゆゝに人声〻て曲者ゆゆゆと打ゆゆる心得〻ゆと友之助袖りて
受るハ銚銚ゆ〻〻でゆゆ中〻紀帛紗ゆゝゆれバこゝハいづ〻〻とたゆゝひ
〻ゆど止ゆゝゝにゆゝゆれバ足ゝ任せて急ぎ行此時東雲明渡り

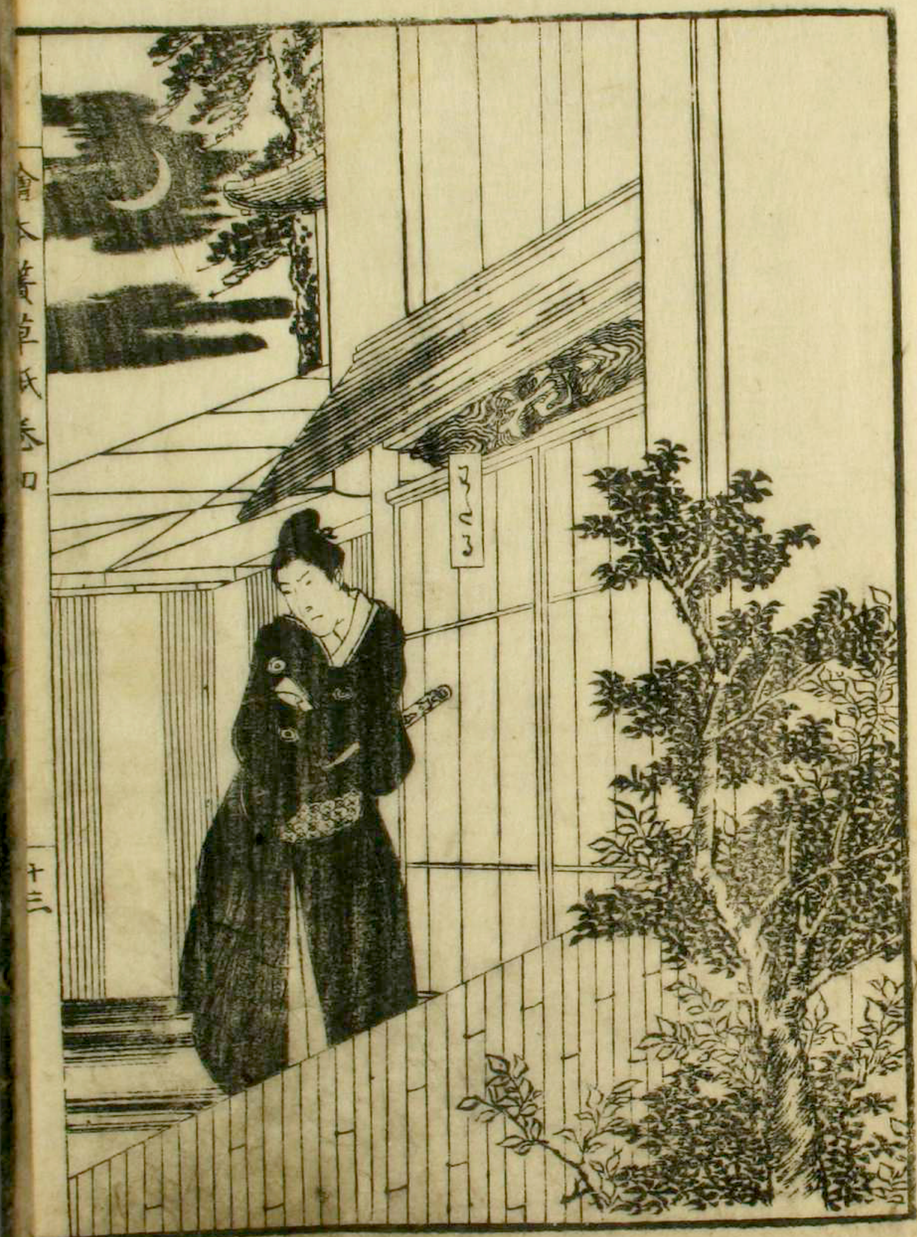
物のかいろも見へつるてバ彼帛紗包と取出し〻紀見るより北枝
乃黄金り磯辺の身の代證文とちくつ猶上包り孝子友之助へ
与ふと云らせり磯辺是を見てこハ正〻〻無〻〻聞へつる此よび
妾とかゞるひ玉へる客人の手跡なりしといへるに大ゝ驚紀且あや
しみ此人是何人るれバかく我〻を慈愛玉へるぞ今一度立帰り對
面〻て禮を述んゝといかゝ磯辺是をしでめつ今迄ゞに名無もし
玉ハど況〻〻逢度を忌玉へるに今更對面〻〻玉へんやといへるり
友之助も実もして尚其方とふ〻〻拜〻つ此所より便船〻〻い
津國さ〻てぞ趣さるも此客人といへるを何人るやを後と讀
て知るべし〻却説春城友之助磯辺を誰とも云〻ぬ客人の恵
にようて身價證章并り共金とめぐ大ふ悦び長筋を

出帆し日わるゝ浪花安治川り着船し先松太夫と訪ひんと城筋山崎
へ趣くに松太夫ハ先年長筋より帰ゆく後両年ゝり爰ふ住し
益困窮身り逼りて今ハ何方へ行しや其所さゞらるゝよ
聞へめきバ両人只顔を見合ゝぞゝり磯辺ハ早双眼り泪を流し
絶の間りずゝ斯まで替り果めるめゝ一人ゞにる紀姉君ハ非命
り此世を去玉ひ頼〻に思ひ尋糸来し父上や母君の行衛ゞゝ
知ざるゝとは去迚ハ妾ゞど幸る紀者いかゞ〻〻ゝこと云と忍
てゝと泣友之助も断なりとて泪数行り及びめれども斯てハ果
じと心を諫つ此世〻ゞに在をなゝゝバ逢奉らん支ハ難かるゝ
一ゆゞ宿所り落居てよゝ紀方便と思推し〻鬼も角もせんりへ
大坂へ立戻りつ長町ハ人の集合多ゝれバ〻て則ち長町ふ旅宿し

磯辺ハ宿に残し置日毎〳〵ふ立出くいつゝ敵とあゝ坂とゝみ増井の水結び佛に祈る一心寺四天王寺に父母乃併果を願ひ或ハ住吉境乃津西ハ九條竹林寺藤浪かる野田の里福嶋北野曽根崎大江の岸と馬手に見て天満川崎細島まて心を付て北南東西の御堂座摩御靈所隅〳〵さゞ求ひるとゝゝ更り似ようし形ぶにる〳〵斯てハ両人の飢ゐも及びるんものを儘の路用空しかゝる内よりゝ紀方便もゞおと思推をるに不計ありひ當てたゝてハ身のせゝ紀ゝ急ぐれゝ國を立ゝ比より等閑り過行し薄縁るゝ〳〵津の國長柄村称厳院ハ父の縁者ゝれバ得ゐも知られべゝうつるりのとゝて磯辺ふも此青と咄し先我一人称厳院ゝ行つ癸僧ゝ況ゝて方丈ゝ面會仕ゝき青言入めゝバ則ち別庵り伴い入〳〵方丈ゝ對顔し出羽之助悴友之助るゝ由述ゝり和尚熟ゝ見てゝ〳〵先年播磨へ羅越し砌足下いまゞ三歳のもろふゝ幼貞覚へありとゝて友之助も疎遠の非禮を詫て扱此度の騒動抑の始より今日ゝ至るまでの一五一十落もゝ〳〵物語るゝ一ッ〳〵驚紀且悲歎し法名を寫して香花を供ゞるどゝつ扱まゝ話説ゝ至るに及んゝ友之助ゝ〳〵ゝ未ゞ敵の在所もれゞゝゝゝ果べき旅ゝも計りがゝれバ召連し女何方ふゝ諾し置べゝ是當下の迷惑ゝゝゝゝ和尚佶と思案し足下ハ勿論その女ゝ斯〳〵致をゞゝゝて耳口暑しゝて生ゝに友之助喜び限りゝ〳〵早速備准仕ゝゝしゝて其日ハ旅宿ゝ帰り磯辺ゝ斯ゝ物語るゝ心を得ゝゝて丈ゝゞ黒髪と半弐遍しゝて切つ二ゝゝ曲ゝゝ角

〻身ハ紫縮緬の着附ゆすぐ色あせる羽織の大振袖を着し
茶宇乃袴ゆ小細ク〻両刀を帯し名さへ鹿園磯之丞と呼ひて
恰も小性の如く小装りし称厳院ゆ将ク行つ同宿の雲水ゆ至る
まて女〻〻事を深く包〻て出家の望ゆるりめと披露し預け置
めく〻小天稟粉黛をかざ〻〻べして花と欺くれ容貌あるに況ゆ〻粧ひ
花ゆるれば是を見る人男女老少〻〻魂を天外ゆ飛し或ハ和尋
を詠じて友を贈る娘ゆもバ詩を賦して消息もとる戯男あまど心中
ふ〻〻を思ひ〻〻手い〻〻れざもハ是ゆ為ゆ疾病を発もるる
りの少〻〻べ題目講ゆ集へる老爺報恩講ふ擲命老嫗もも
先この小性の支を話道し而后寒暑の挨拶ゆ及ぶもあ〻〻かゆ
斯て友之助ハ所〻を徘徊し普く尋ね求ゆ〻〻と〻〻今ゆ

敵のもれざもバ又も他國を捜し見ん物と〻〻〻私尚ゆ如此〻〻の支
残頼置て泉州〻〻河内大和の方を徘徊し却説話嬬婦梶子ハ花
園豆と仮名し医業を表〻して大津の駅ゆ在し故蕩ゆ散財
し此度を五十掴左門を江州大津ふ残し置已一人大坂川嵜ゆ来
て例乃奇療を行ひめるゆ日ゆ〻〻して風聞世上ゆ弘まり
忽ち数多の金銀を得めるバ折〻ハ左門の方へ遣ハし其身歓楽
ふ驕りゆり然るに称厳院の和尚梅溪ハ一朝難病を発し日を歴
てやゝ〻危く見へめるに弟子僧数多集合磯之丞も共に介抱怠
て〻〻名を得し医師を悉く招請し医療手を尽し〻めるとも
功験なく〻ざるによりて此比風聞高き花園豆ふ頼んとて評義決し
即座ゆ使を馳く向へめるに早速ゆ入来し〻〻と胗察し例の奇



香と香炉ふ薫じ掌を以て鳩尾より下関の辺りを二三度按ずれ
及んで急ち病者快然として頓て苦しみを忘れ三日を暦て病
全く愈ぬるバ集僧奇異の思をなす賞嘆して止ざる夫より
して梅渓亘益懇意に交り日ごとに入来て或ハ圍碁を楽しむ又ハ一杯
の濁酒ふ四方を語りて毎二ふ如びる処るに亘原来婦なれば
彼ふ性鹿園礒之丞と懸相ひ思ひ過しぬるに熟〻思ひるハ我と男子と思ふあて幸なれ者ども
よしなと見せ置るバ言よるよすがも有るんりのとと元より金銀
乏しかるぬ身なれバ礒之丞の事に付て何をとれく心とつけ
ぬるハ到来せしとて絹布を送り或ハ人ふ者ども五枚十枚の
黄金とりくるるに礒之丞ハ心を得ぬ事なると思へバ始めの

程ハ固辞ぬるとぞ思ひ計られて妾を男子と思ひ意慕ひ
とあるとおぐるよりも其座ふ及びるハ又よ死方便もなりんりの
とも知ぬ夫の旅金銀を貯へ置ふハ者ども只辱しと
答て受納ぬるに亘ハ心中ふ喜びいふ金銀を送る度
して今ハ言出んと義理となりてもるる業引せざるんやなる
日人るに折を考へ思ひの余りを口説るに礒之丞左ありて
るんりのと區〻と回答置ぬるふ今ハ度重りて泣つ啼言つ挑れ
バ礒之丞中遁きへり言あるて翌晩と約つ猶忍びて知ぬ
仕玉ひ給へて活龍活見應回ぬるふ亘ハ雀躍して喜び其日を
舘へ帰りつ一夜を千夜のごとひふ更る寸刻も睡ずて翌の
夜をのと待居るり却説鹿園礒之丞ハ心りなる約束を仕

めんどゝ如何〳〵て此難を遁さんとさゝ〻ぐ思推るゝ内此頃高野より食客〳〵弁之助といふる小性十八歳ゟ成るゞ腕集人に勝ゝて永く是を罪ふ〳〵高野を追放せ〳〵れ那智の方へ廻らんやう〳〵稱藤堂ノ文ハ高野ゟゆゝ行とバとて言と工ゝに〳〵て一月計養ハゝと居りるゟ磯之丞偶然是ゟ心付〳〵傍ゟ招ゝて備由を詰り斯計〳〵ひ玉りれゝ〳〵決ようゟ三枚の金玖出〳〵て是と与ゟれバ弁之助左右ゟ〳〵請合心安ゟれ首尾ようゟ仕負せんゟうんと應ゝるに磯之丞大ゟ悦び猶斯〳〵と囑付扨其夜ゟる成ゟ〳〵バ弁之助の示綿の垢付〳〵衣類と取捨已ゞ衣服と着せゟ我部家ゟ待せ置其身ハ弁之助ゞ森所ゟ行て今や来ゟと伺ひ居るに亘来て梅溪と例の圍碁二三番ゟ及んで風邪の由と偽り帰ゟゟふて立戻ゟ

兼て約せ〳〵部家の戸乃僮ゟ朋〳〵とさ〳〵半面ゟ衾覆ひ〳〵ゟ角ゟ人待体ゟ見へゟゟと亘来ゟてひそ〳〵と声ゞ〳〵に言入ゟゟ應もなきで弁之助ハ灯吹消戸と開ゟゟ手を携へて伴ひ入と隔壁ゟゟゞ〳〵磯之丞ゟ〳〵ゟゟと忍び居る嗚呼亘ゞ心中いゞ〳〵ゟゟゞ日比乃幽情花月の會樂堂ゟ〳〵ゟゟゟ物ゟん語即夜もゟのゞ〳〵と明めゟバ人ゟ見ゟゟゞ物ゟゟて名残おゟ〳〵ゟゟ又の夜ゟもゟれ一人會意でゟゟゟと立出衣体繕ひ我家ゟゟ〳〵急ゞ出ゟ去ゞ鹿園磯之丞ハ難ゟ〳〵亘を断ゟて毒蛇の潭と遁ゟ〳〵心地〳〵と起出て庭ゟ出俳徊の花を手折ゟゞ此時彼時俳徊ゟゟに花園亘いゟゟ早く入来ゟゟ斯と見ゟゟ折幸ゟゟて磯之丞ゞ傍ゟ行い常に替りていとゟゟめゟく言ゟゟゟハ去ゟゟる夜辺の情露

忘れ侍べ妾が女たる事ハ君なくて明世〳〵人ハいかゞざれぞ必乎
人ふるまゝ世玉ひそ此支ようなてハいと物語るあるんとそハ蒼
卒ゝハ語〳〵が〳〵斯契りしかゝハ妾が良人と思ひ侍るバ君もま
りゝ迫る心替らせ玉ふまゝて懐中より一奇品と取出しつゝ
られ世ゝ二ツとなくと名香ゆてたゝく死ゝ至るものを此香を薫
もゝとバ蘇生をるれ名香なれど良人の情乃嬉〳〵され少〳〵別ち
泰〳〵もゝ等閑うるせゝ玉ひそゝて僅を包で与ふるふ礒之丞
先是を納め心中ゝ思〳〵〳〵言語同断彼女ゝとハ是ふゝ子細
なくてやハ殊ゝ此香ハ兼て良人の聞へたる延壽香ふてハかゞゝ
何ゝ中れ敵を尋るよ牛ゝふもかゝるんものと語問てそハ聞もる
まぐゝ重宝ゝはりの紙惠〳〵玉ふる支の嬉〳〵さゝる此香ゝ

御家ゝ傳ゝはりのゝ若又何まゝゝゝ求ゝさせゝ物ゝゝと言ふ豆偽りて
〳〵妾が祖父ハ本天竺の人るゝゝ長崎に来りて傾城ふ契り〳〵に傾
城妾が父と孕り祖父なゝゝ人天竺ゝ帰るに及で傾城ふ与へゝめる名香
と今〳〵妾の持つゝ侍るゝ物語つゝハ兎まれ角まれ君と良人
し思ひ侍るバ身ふ替が〳〵一品とゝゝ奉〳〵るんバ必ず
見捨玉ゝれゝて礒之丞の手と取つ此花奢ふ手に似るゝ陽
物の弓削殿ふるゝ〳〵で〳〵〳〵逞さハ人ゝゝ妾が幸ふてゝ
ゝ〳〵ゝ戯言と吐て又後ゝ来りゝんゝて恍惚〳〵
帰りゝ爰に又小性弁之助ハ物影ふひそみて最前より九一五一十審ふ
聞取ゝてハ豆女ゝ身ゝゝて医ゝ業ゝすゝハ彼名香ゝゝバゝゝ我も
又是とりて身と立んふゝと尋思〳〵礒之丞ふ向てゝ〳〵某年来

出家の望ありて諸寺を巡り戒を全うして未女を傍にも寄せず然るに
其許の願ひよりて疇昔の行ひおりひろや斯這女にして年来の戒を破
もうとは今更言て詮なし故に某今日より俳意を退け俗に交りて身を
立んと欲をされば貴殿の所持せる名香と某が玉にと言ば此品其許の
物にもらべば我に得させよと言にそは断にいなんど此香に付てそ
某も又思ふ子細あれば是のみは免しゆるし其許には是を参らすべし
とて黄金五枚を与へられども弁之助曽て諾ぜず少の黄金何ぞせん
ぜん其香を得させざるに於ては某又もぐさめう有とて志めてもぬ
もどる礒之丞は又此香をとりて敵を尋る手蔓ともせんものと思へば
只管に詫るに弁之助佶と一ツの悪計を思推し色を直して
左仰るとあめて乞得んも又心ゑなに似られば此度は望ひ

彼五枚の黄金と請られば礒之丞大に悦び其侭に差置ぬ然るに
弁之助忍びて亘のりに行言を工にして〻〻其許疇昔の挙止
今に礒之丞と思ひ玉つるかなるべ〻〻そは人違にして恩違しは則斯中
禁なり其訳解は礒之丞其許を深く忌嫌とにくむも折られ恵にぜひ
なく許諾し回答をしぬ然るに昨日に及んで某はいと〻〻如是
して賄賂を送りて乞さすに頼めとば竟に前夜のちぎりに及び其
許是を志にて今朝彼に名香を与へられしに彼の香に付く
深き謂あり殊に女を隠して世を惑ふ曲者某に行て密に正しくれ
よ猶其上聴に訴へ罪を正さんといふ某はいと〻〻思ふに常言ふと
袖の振合ぞ〻〻他生の縁といふ況て一度抱とかはせば我又吾妹子の
思をいで〻〻に今其許の難と聞に忍びて斯やうに自然心

中におぼへる事にゆらいで兎も角も捨置りく又由縁有支ふゆいで
今宵斯這と討課しゆく我の〻是とまれば他とりて支ハゆいで
といふて亘忽ち色を失ひ能あとまゝ世平人物うゐ彼香に付てふ
深さと分別ひつ夫ハさ〻置斯這今ハで妻ゞ恵と受ゐゞ〻恩と仇
なる言条此怨の〻ふても生置がゞ〻君今妻と妻とも思ひ玉いゝバ
妻も又良人と頼奉るべ〻此上ハ偶に力をそへ玉ひて彼と討せゝび
てんやと言にそハ心易ひ事ふりて今宵初更の鐘乃響なバ寺に忍び
ゆ〻〻某の部家ふそ〻入置ゆべ〻討果〻玉ゞ跡ハ又ふ方便乃
そバ必〻も心〻ゆゞ〻べとて猶密に詮〻弁之助ハ称厳院ち
立帰りぬ斯て其日も暮ぬゝ梅渓磯之丞と招て最前より感冒
と思〻く頭痛るれバ其許労と厭ひど亘主に行て調剤所望〻

来りゆ〻くとゝるに畏ゆとて居間に退くと弁之助是を聞て磯之丞
の袖を扣へ其も少〻悪寒ひるとバ某と乞得んと思ふ折節なれ此使某
恭ゆゞ〻其許に八某ふ代りて某の部家に入て写経をそ〻〻玉ひり
ゆ〻くとて急ぎ外の方へ立出ぬ斯て亘ハ時刻るゝめと称厳院ふ
入来るに梅渓幸るゝれ愚僧感冒ふて頭痛頻りにいぬ今磯之丞
をゝて調剤を乞に遣せ〻に途中ふて逢玉ひぬやといふに亘こハ
謀相違〻ぬと思へバ切脉もそこ〻〻急ぎ帰りて調合仕ゆ〻いん
磯之丞の待兼つゝんと乗が如くふ駈帰りぬ是るん梅渓が工〻〻
支ふひゝ〻て磯之丞弁之助ゞ幸不幸ハ将に天のまゝ〻しゆる
所るゝ〻去程に亘ハ磯之丞を討果さんと怒り胸を裂ゞおゝ〻
るれバ我家に帰りて表の戸をそ〻〻開き伺ひ見るに一間の障子に

了角の人影移ぬるを心得ぬると脇差引抜礒之丞思ひ知るべと障子越
よりさと突弁之助ハ鳴と叫つ某と名乗も聞ぞ障子蹴放しつと入る
物をも言ハ切付ると弁之助ハ脊戸へうけ出隣家をさして駈入と追さ
りのと追行て肩先より二の腕かけてちりぜんど切落もに忽ち数多
の人〻人殺しるりと散動ふぞ捕へられるバ身のうへなりとく急ぎ
我家へ立帰り彼名香を懐ふして跡をも見ぞして遁去ぬ去程ゝ
礒之丞ハ弁之助の戻りの遅きをいぶかり弁之助と役ゝ代つ〻を
梅渓ゝ断りつ急ぎ花園へ至り見るに弁之助亘ともに見へぞ隣家
の人〻騒動をる光景るれバ礒之丞行て見るに豈計らんや弁之助
血ゝ成て倒きれバ大り驚き傍の人〻尋るに所の長大塚善左衛門
いるハ締起ハ走びりくども花園亘といる医師乃拳止ゝ咎

うるに先気附を用ひ水をそゝぐるどもれども更ゝ功もなきうるれぞ
佶と沈吟〻亘ゝ得〻〻彼香を取出〻少〻と薫て差寄るゝ奇
るるうる弁之助忽ち両眼を開きてこハ礒之丞主ゝいう語るも振然い
らくども終際の懺悔一通り聞く〻玉いれ〻〻彼亘女の身をりて医を
業ともるハ全く名香を以てるるとバ我も此香ゝにあるハ立身の賜
ものゝと其許ゝ乞ども是を与へぞ所全少〻れ香を得んより亘
乃所持せる代我物ゝせんものをと其許の支をさゝぐに悪言〻
其許を殺さを跡へ廻つて彼香をうばひ朋友の敵と亘もるるるの
ふせんと謀全く調ひ今宵あてとあり入折節和尚の使ゝ其許を
出〻てハ謀の兇答るうと好んで代ゝ某が爰へ来ゝて亘の為ゝ
殺されハ我と我罪天よりせる玉つるりと此期ゝ至ての後悔ゝ

ゆゑや厨が生國ハ播磨のよゝと聞ぬ香の事ハ故ありとて蒼卒ゝハ語らゞゝ聞ふ礒之丞さてハ思ひ當る支ありて有るれ能こそ聞へ玉つるものゝ去迚ハ其許の災ひ締起ハ某ゞ頼ゝ〳〵ゝの落命ゝゝ〳〵〳〵ありてはるれそハ言てかゝゝ死後乃吊ハ及ばんゝけハ勤めゆゝハんと聞ゝ〳〵弁之助嬉〳〵げふ庁掌を以てふゝ拜ゝつ二度息ハ絶てゞり此趣を書認め大塚善左衛門を以て〳〵聽ゝ訴へ弁之助の骸ハ徐厳院り葬りかゝのゞゝ取行ひ亘ハ聽ゝり御尋ありゝゝ嚴命有て此一条ハ事済ぬ

繪本寶草紙卷之四終